

史跡興福寺旧境内

興福寺鐘樓の発掘調査

現地見学会資料

場所：法相宗大本山興福寺境内

日時：令和2年9月28日 11～15時



概要

興福寺は、藤原不比等が奈良時代はじめ（8世紀前半）に、平城京を京三帝七坊の地に建立した藤原氏の仏寺です。奈良時代から中世を通じて、たび重なる火災に遭いながらも再建を繰り返し、中金堂院を中心とする大伽藍を誇りました。興福寺では「興福寺境内整備調査」（1998年）に基づき、寺觀の復元・整備を進めていました。奈良文化財研究所では1998年以来、中金堂院や南大門などの大規模な発掘調査を継続しておこなっており、今回、鐘楼地区について、規模と構造を確認するための発掘調査を7月よりおこなっています。

鐘楼基壇全景(北西から)



持腰基礎の抜取溝（丸西から）

創建時からの基壇上では四周を巡る素掘りの溝を検出しました。鐘楼の初層を覆う持腰の基礎を抜き取った痕跡を見られます。



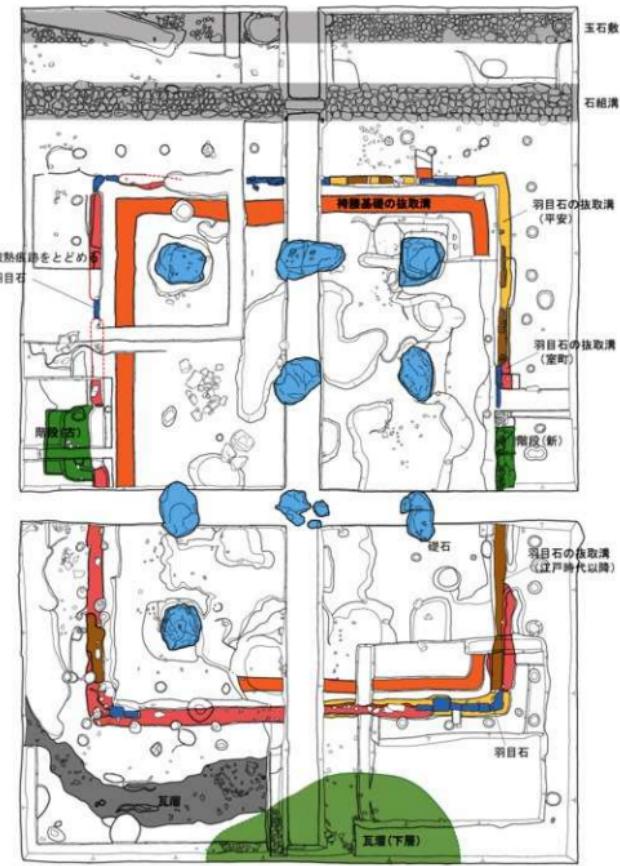
たび重なる罹災の痕跡

基壇西側には炭層や焼土が幾重にも重なり、基壇西面北部に残る羽目石は、複数回被熱した痕跡をとどめています。



室町時代に据え直された羽目石

基壇東面では、室町時代に基壇縁に新たに積み土を行い、基壇外装の羽目石を据え直して大きく改修をおこなった痕跡が認められました。



成果

①鐘楼の創建時及び再建時の建物規模と構造が判明

鐘楼の基壇が良好な状態で残存しており、創建当初の建物規模と構造を確認できました。平面規模については桁行3間（約10.1m、34尺）× 梁行2間（約6.5m、22尺）で経蔵と同じであり、これまでの中金堂や南大門などの調査成果と同じく、たび重なる再建に際してもその規模を踏襲してきたことがわかりました。

また、持腰をもつ構造であった可能性が高いことが判明しました。興福寺の線引きをまとめる文献『興福寺流記』には鐘楼の規模が二通り記述されており、その理由が課題となっていました。今回、持腰の基礎の抜取溝をはじめて検出したことと、この二通りの記述は柱位置での平面規模と、持腰下端の平面規模を意味していると解釈できます。持腰をもつ鐘楼は、これまで平安時代後期以降のものが知られていましたが、今回の調査により、奈良時代の創建期にまで遡る可能性が高くなりました。

②鐘楼の再建工事の様相が判明

たび重なる焼失を受けて、少なくとも平安時代・室町時代に基壇外装の改修をおこなっている様子を確認しました。また、室町時代の再建に際しては、それまでの焼失と再建で基壇周囲に繰り返し整地をおこなったために低くなった基壇高を補うため、新たに基壇土を積み足して補修するなど、大幅な改修工事をおこなっていることがわかりました。

鐘楼地区 遺構平面図

0 5m